

板橋区 グリーンカレッジ 「文学」ミニ講座



第一回「夏目漱石」
2020年5月

堀 啓子

はじめに



- 皆さん、こんにちは。
- お元気にお過ごしでしょうか。

- 令和二年度 板橋グリーンカレッジ専門課程 文化文学コース担当(予定でした)東海大学の堀啓子と申します。

- 今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、グリーンカレッジ講座も通常開校にはならず、受講を希望されていた皆さんも、とても残念な思いをされていらっしゃるのではないのでしょうか。

ちょっとブレイク:ミニ講座



- いろいろ落ち着かない日々が続いていますが、皆さんには、まずはお体をお大切にお過ごしいただければと存じます。
- 講座は延期になりましたが、何か私にできることがあればと思い、ほんの少しだけ、文学にまつわるお話を「ミニ講座」として配信させていただければと思い立ちました。
- ごく簡単なものですが、お暇なときにでもお茶を上がりつつ、ひととき文学に想いを馳せていただければ、幸いです。

夏目漱石について



- 今回は、夏目漱石についてお話をさせていただきます。
- 漱石は日本の近代文学を代表する文豪です。
- 皆さんの中にもファンの方が大勢いらっしゃるのではないのでしょうか？
- 漱石は最初は「作家」ではなく「教師」でした。そして若い頃には俳句に親しんでいました。
- そんな漱石の本格的な創作活動は、教職を辞し、新聞小説家となってから始まりました。

『朝日新聞』の専属作家に



- 今から113年前、漱石は当時、教鞭をとっていた東京帝国大学を辞めて『朝日新聞』に入社し、専属作家となりました。
- 漱石の作品の多くが『朝日新聞』の連載小説なのはそのためです。
- このとき、漱石は40歳で、月俸200円で迎えられました。
- これは当時の経済部長を超える破格の待遇で、彼がどれほど期待されていたかよくわかります。

最初の連載『虞美人草』



- ここで漱石が最初に発表したのが『虞美人草』です。
- 次のページから、『虞美人草』の冒頭を、当時の『朝日新聞』と少し読みやすくしたものを載せてみました。
- 冒頭はこんな風に始まります。

『虞美人草』連載第一回



朝 京 東 日 三 十 二 月 六 年 十 四 治 明 (可認物便郵類三第)



(一)の一 第二回 漱石

「随分遠いね。元來何處から登るのだ。」
と一人が手巾で顔を拭きながら立留つた。
「何處か已にも判然せんがね。何處から
登つたつて、同じ事だ。山はあすこに見えて
居るんだから」
と顔も體軀も四角に出来上つた男が無難作
に答へた。
反を打つた中折れの茶の甕の下から、深
き眉を動かしながら、見上げる頭の上には、
微茫なる春の空の、底迄も藍を滲はして、
吹けば搖ぐかど怪しまる、程柔かき中に屹
然として、せうする氣かと云はぬ許りに叙
山が聳ねてゐる。
「恐ろしい頑固な山だなあ」と四角な胸
を突き出して、一寸櫛の杖に身を倚たせて
居たが、
「あんなに見ゆるんだから、國はなす」
と今度は叙山を輕蔑した様な事を云ふ。
「あんなに見ゆるつて、見ゆるのは今朝
宿を立つ時から見えて居る。京都へ来て叙
山が見えなくなつちや大變だ」
「だから見えてるから、好いぢやないか。
餘計な事を云はずに歩行いて居れば自然と
山の上へ出るさ」

↑ 人物が
京都に

同じ個所を読みやすくしてみます



- 「随分遠いね。元来どこから登るのだ」
と一人が手巾(ハンケチ)で額を拭きながら立ち留った。
- 「どこか己(おれ)にも判然せんがね。どこから登ったって、同じ事だ。山はあすこに見えているんだから」
と顔も体軀(からだ)も四角に出来上った男が無雑作に答えた。
- 反(そり)を打った中折れの茶の廂(ひさし)の下から、深き眉を動かしながら、見上げる頭の上には、微茫(かすか)なる春の空の、底までも藍(あい)を漂わして、吹けば揺(うご)くかと怪しまるるほど柔らかき中に屹然(きつぜん)として、どうする気かと云いわぬばかりに叡山(えいざん)が聳(そび)えている。

続き



- 「恐ろしい頑固な山だなあ」と四角な胸を突き出して、ちょっと桜の杖に身をもたせていたが、「あんなに見えるんだから、訳(わけ)はない」と今度は叡山(えいざん)を軽蔑(けいべつ)したような事を云う。
- 「あんなに見えるって、見えるのは今朝宿を立つ時から見えている。京都へ来て叡山が見えなくなっちゃ大変だ」
- 「だから見えてるから、好いじゃないか。余計な事を云わずに歩行(ある)いていれば自然と山の上へ出るさ」

作品背景



- いかがでしたか？
- 新聞には虞美人草の画も描かれていますね。
- この作品は、東京が主な舞台となるのですが、最初は登場人物が京都に滞在している場面から始まります。
- 初めての新聞小説に臨み、漱石は関西の読者にも、とても気を遣っていたことがわかります。
- そんな漱石の苦心のおかげでこの作品は大変な人気作品となりました。

創作の時期



- 連載は6月から始まるのですが、漱石がこの話を考えていたのはちょうど5月の今頃でした。
- 少しピークを過ぎたかもしれませんが、ときどきポピーが咲いているのを見かけます。
- ポピーの別名はひなげし、あるいは虞美人草と言います。

名前の由来



- 漱石は、明治40年の5月、散歩していて、ふと見かけた花の名を、植木屋の男性に尋ねました。
- すると「虞美人草」という返事だったので、それをそのまま書きかけの小説のタイトルにしました。これが、新聞小説『虞美人草』のタイトルの由来です。
- もし、イメージや雰囲気異なるひなげしやポピー、という答えを聞いていたらどうなっていたのでしょうか？想像してみるのも楽しいですね。

おわりに



- しばらくは思うような日常生活を営むことができず、窮屈な日々が続くかもしれません。
- ただ、こんな時だから本をゆっくり読む時間を大切にできるように思えます。
- 皆さんもどうぞお体にお気をつけて、甘党だった漱石の好物のビスケットをお茶うけに、花も小説も、ぜひ虞美人草をご覧になってみてください。
- それではまた次回に！皆さんに教室でお目にかかれま
す日を楽しみにしています。

